

点が残されている。鈴木は1981年8月長崎大学トカラ列島生物調査に参加し、口之島・中ノ島・宝島でヤモリ類46頭を含むトカゲ類67頭を採集した。そのうちヤモリ以外では、アオカナヘビの♂の体色斑紋が対岸の奄美大島の個体群よりもむしろ沖縄本島の個体群に類似すること、ヘリグロヒメトカゲが中ノ島から初記録である他は、特に注目すべき点は見当らなかった。ヤモリ類では口之島産7頭および中ノ島産23頭がニホンヤモリ *Gekko japonicus* であったが、本土や南西諸島産の他の個体群とやや異なる特徴が見られた。すなわち、一般に大型でSVL 60~65mmに達し、体背面は一様な顆粒状細鱗が敷石状に分布して重ならず、大粒の細鱗は数が極めて少なくまばらで、ほとんど存在しない個体もある。また尾の環状溝の際で背中線の両側に配列する1対の大粒細鱗は、尾の基部付近においても全く見当らない。側肛突起 (cloacal spur) は大きくて1個。第4趾の scansors や前肛孔 (preanal pores) の様子はニホンヤモリと大差がなかった。宝島産の16頭は日本産 *Gekko* 属のヤモリ類と幾つかの点で相違が見られ、また外国産 *Gekko* 属にも標徴が同じな種が見当らない。すなわち、タワヤモリ同様雌雄共に前肛孔も femoral pores も欠くが、体背面には敷石状に並ぶ顆粒状細鱗の間に大粒鱗が介在する。尾環鱗 (caudal tubercles) は尾の基部から数列の環状溝に存在している。側肛突起は大きくて1個。SVLは65~68mmほどに達し尾長はほぼ同大。頭部腹面には顕著な暗色斑紋が散在し、上唇の白色縦条がめだつ。

12. カナヘビの発生段階 2. 孵卵温度と発生段階 岡 俊樹 (東京学芸大・生物)

Developmental processes in the lizard, *Takydromus tachydromoides*. 2. Effects of incubation temperatures on a series of developmental stages. Toshiki Oka

カナヘビにおける、産卵直後から孵化時までの胚の形態変化につき先に報告したが (岡, 佐々木, 1975), 今回は孵卵温度を一定に保った時の発生経過の観察を行なった。孵卵温度は $25.0 \pm 0.5^\circ\text{C}$ ならびに $29.5 \pm 0.5^\circ\text{C}$ の二段階に設定し、発生段階としては Dufaure and Hubert (1961) の *Lacerta vivipara* の結果を使用した。産卵直後の卵中の胚は体節数15—16対の神経胚に達しており、st. 24—25に相当する。孵化までに要する日数、即ち卵期間は、 25°C では 40.25 ± 0.5 日、 29.5°C では 30.33 ± 0.47 日であり、両者間に約10日の差が認められた。また、両温度下における胚の死亡率の間には有意の差は認められなかった。なお、室温 ($21.5—30.5^\circ\text{C}$, 平均 $24.0 \pm 2.9^\circ\text{C}$) 下での卵期間は 43.21 ± 3.55 日であった (岡, 1975)。これら孵卵温度と卵期間との関係は、本種における石原 (1964) の観察結果と良く一致する。孵卵日数と各発生段階との間には、体部での鱗の分化が進行中の st. 38までは、両温度下における場合とも直線的な関係が認められたが、その後の発生経過は *L. vivipara* に比べて遅いようである。

13. 温度変化とカメレオンの生態 牧野 信司 (日本熱帯動植物研)

Some ecological observations on chameleons. Shinji Makino

カメレオン科に属するものは約80種知られ、その多くはアフリカとマダガスカルに産し、少数がその周縁地域とインド・セイロンに分布している。この仲間は生態的に興味ある習性を持ち、体色変化は良く知られるが、顕著なのは採餌行動である。このため種々の実験が試みられているが、その人工飼育は仲々むづかしい。先年、上野動物園に於て *C. jacksoni* の雄が2年